て、むらごのひもしたり、いみじうなまめかしうみえたり、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿三日庚辰、悠紀主基御帳懸白帷、東西南三面卷上之、悠紀小葵文綾二色、紐如常、施繪、寛治例也、主基白唐綾、以色々糸縫竹桐鳳凰等、天仁例云々、意趣如軟障、

〔宇治拾遺物語十一〕清水寺御帳給る女の事

いまはむかし、たよりなかりける女の、清水にあながちにまいるありけり、略中なく〳〵観音をうらみ申て、いかなる先世のむくひなりとも、たゞすこしのたより給候はんといりもみ申て、御前にうつぶし〳〵たりけるよの夢に、御前よりとて、かくあながちに申せば、いとおしくおぼしめせど、すこしにても、あるべきたよりのなければ、その事をおぼしめしなげくなり、これを給れとて、御帳のかたびらをいとよくたゝみて、前にうちをかるとみて夢さめて、御あかしのひかりにみれば、夢のごとく御帳のかたびらたゝまれてまへにあるをみるに、さはこれよりほかに、たぶべき物のなきにこそあんなれとおもふに、身のほどの思ゑられて、かなしくて申やう、これさらに給はらじ、すこしのたよりも候はゞ、にしきをも御ちやうにはぬひてまいらせんとこそ思候に、此御帳計を給はりてまかり出べきやうも候はず、返しまいらせさぶらひなんと申て、犬ふせぎの内にさし入てをきぬ、

帳紐

〔後拾遺和歌集十哀傷〕一條院の御時、皇后宮かくれ給て後、御帳のかたびらのひもに、むすび付られたる文を見付たれば、内にも御覽ぜさせよとおぼしがほにうた三つかきつけられたりける中に、略歌

帽額

〔雅亮装束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

おなじきまのもやに御帳あり、略中つぎにもかうをひく、もかうはかたびらのやうにて、おもてばかりあるを、ながさまにうらあはせに、なかおりにしてわなを玄もにて、うしとらのすみより